

富山大学平成 30 年度卒業論文

富岩運河を利用した観光振興への取り組み  
—水上ラインの事例を中心に—

人文学部人文学科  
社会文化コース社会学分野  
学籍番号 11510095 田中蒼大

## 《目次》

<b>第1章</b>	<b>本研究について</b>	1
第1節	問題関心	1
第2節	調査概要	2
<b>第2章</b>	<b>富岩運河と環水公園の整備</b>	3
第1節	富岩運河や環水公園に関する整備の歴史	3
第1項	富岩運河の状態	
第2項	新都市拠点整備事業やポートルネッサンス 21 による整備計画	
第3項	富岩運河の入り口である環水公園の景観の完成まで	
<b>第3章</b>	<b>富岩水上ラインについて</b>	7
第1節	水上ラインの基本情報	7
第1項	富岩水上ラインの概要	
第2項	富岩水上ラインの歴史	
第3項	水上ラインのルート	
第4項	クルーズの紹介	
第2節	水上ラインの運行について	11
第1項	富岩船舶株式会社	
第2項	水上ラインの運行期間と利用状況	
第3項	水上ラインの運行準備期間	
第4項	まとめ	
第3節	水上ラインにかかわる人々の取り組み	14
第1項	水上ラインに関わる人たち	
第2項	一般乗組員	
第3項	水上ラインのガイド	
第4項	水上ラインのガイドを行っている団体	
第5項	水上ラインのガイドの勉強手段としての「とやま観光未来創造塾」	
第6項	まとめ	
第4節	観光資源としての水上ライン	22
第1項	水上ラインの見どころである中島閘門	
第2項	水上ラインのガイド業務の内容	
第3項	水上ラインを訪れる観光客	
第4項	水上ラインに乗船した後の観光客の動き	
第5項	まとめ	

第4章 考察と今後の展望	28
第1節 考察	28
第2節 今後の展望	29

参考文献・URL	31
----------	----

《図表一覧》

図 2-1	「昭和中期～後期の富岩運河の状況」	4
図 2-2	「運河マップ(エントランスゾーンの詳細情報)」	5
図 2-3	「環水公園の施設案内図」	6
図 3-1	「水上ライン運行ルート」	8
図 3-2	「fugan(ふがん)」	9
図 3-3	「sora(そら)」	9
図 3-4	「もみじ」	10
図 3-5	図 3-5「平成 30 年度 富岩水上ライン利用状況(3月 24 日～10 月 31 日)」	13
図 3-6	「富岩運河かたりべの会のガイド料の表」	18
図 3-7	「地域に心を寄せる子どもを目指して」	19
図 3-8	「中島閘門」	22
図 3-9	「富岩水上ラインの地域別利用状況(H30 年度 9 月末まで)」	26

## 第1章 本研究について

### 第1節 問題関心

富山駅の駅北方面を進んでいくと、「富岩運河環水公園」(以下、環水公園)が見えてくる。富岩運河の特徴である旧舟だまりをそのまま残した水辺空間を中心に、その周りを囲むように木々、芝生が生えており、自然と富岩運河独自の特徴を生かした作りで、休日は県内外から観光客が訪れる憩いの空間となっている。

また、そこに流れ込んでいる富岩運河を利用し、富山県と富山市では、環水公園から中島閘門を通り、岩瀬を結ぶ運河クルーズ船、「富岩水上ライン」(以下、水上ライン)を運航している。

環水公園の中でも特にこの富岩運河を利用した取り組みである「水上ライン」に焦点を当て、運河の中心となっている環水公園や運河自体がどのように整備され、そこで水上ラインを中心としてどのような取り組みが行われているのか。また、特に観光客にどのように利用され、それが県内外にどのような影響を与えているのかを明らかにし、今後の展望について考察をしていきたい。

## 第2節 調査概要

富岩水上ラインの取り組みと調査にあたって、富岩運河と富岩運河環水公園の整備の歴史、水上ラインの取り組みに関連することについて、関係者へのインタビューやフィールドワークを通して研究を進めてきた。以下がインタビューとインタビュー日時、インタビュー内容をまとめたものである。インタビュー結果をもとに、第2章から第4章で分析を行っている。

2017年10月30日 富岩運河パークセンター 山本さん

富岩運河と富岩運河環水公園の日常的な管理についての質問

2017年11月13日 富山県都市計画課 牧野さん、鹿熊さん 港湾課 玉井さん

富岩運河と環水公園の歴史と日常的な管理についての質問

2018年1月10日 富山県観光振興室 成田さん

環水公園と富岩水上ラインのイベント等観光振興への取り組みについて

2018年7月20日10時10分 富岩水上ライン乗船

フィールドワーク

2018年07月23日 富岩船舶株式会社 岩脇さん

富岩水上ラインで使用している船舶の日常的な管理と乗務員について

2018年10月18日 富岩運河かたりべの会 馬場さん

富岩水上ラインでのガイド業務について

2018年11月13日 富山県観光振興室 野崎さん 栗林さん

富岩水上ラインの観光振興へ向けた取り組みとガイド業務について

2018年11月13日 一般社団法人地域デザイン研究所 宝田さん(メールにて)

富岩水上ラインのガイド業務を行っている乗務員について

## 第2章 富岩運河と環水公園の整備

### 第1節 富岩運河や環水公園に関する整備の歴史

富岩水上ラインは富岩運河や富岩運河環水公園の美しい水辺空間を利用したものになっている。その美しい水辺空間がどのように整備されてきたのかをこの節で明らかにしていく。

#### 第1項 富岩運河の状態

富山県土木部港湾課長であった田所さんは、『港湾』の8月号の「いきいきカナル富山」の中で、国内有数長大の運河である富岩運河の生い立ちについて述べている(田所、1988)。そもそも富岩運河は、富山駅北地区に至る延長5.5キロメートル、水面幅60メートルでパナマ運河式の中島閘門を有する長大な運河である。昭和47年以前、富岩運河は貯木場や木材の運搬として利用されていた。しかし、当時は木材の扱いが船からトラックでの運搬である陸上移送へ移行したため、年々利用が低下し、中島閘門以南はほとんど遊休化している状態であった。

そのため、図2-1がその当時の様子を写真に収めたものになっているが、ヘドロが堆積したり、水質の汚染が問題視されていたりと問題が続出していたため、周辺住民から埋め立てを求める声が次第に大きくなっていった。このために、県は昭和47年から、富岩運河再利用に対する各種調査を進めていき、一時的には、道路や公園排水路等への利用の転換、すなわち埋め立て案が有力視されていたのである。

しかし、そんな風潮から一転、昭和50年代後半には、富山の「美しいふるさとづくり」のためには運河の水面は不可欠であり、「運河再生」こそが、最も望ましい方法であると風潮が変化する。その風潮の変化には、県が大きく方針転換を行われたのが大きく、その後、町中にある水面を生かした街の形に整備を進めていくことになる。県庁の玉井さんは、「この方向転換には、当時の知事や都市計画課課長の意向が強かった」とおっしゃられていたが、その課長は田所さん、富山県知事は中沖さんではないかと推察される。その方向転換の方針では、都心部に水面があるのは珍しいため、利用する手はないのではないか、という周辺住民からの意見が多く出たことも要因の一つである。

このようにして、環水公園を含む富岩運河が今の美しい運河として再生し、富山県のシンボルになることになった。その後の整備に関しては次の項で詳しく見ていく。



図 2-1 「昭和中期～後期の富岩運河の状況」 富山県港湾課より提供

## 第 2 項 新都市拠点整備事業やポートルネッサンス 21 による整備計画

大きな方向転換の後には、貴重な水面を利用した再整備の計画が立てられていくことになる。昭和 60 年代には、ポートルネッサンス 21 という、港湾整備事業と民間事業者が一緒になって、港や運河を再整備する潮流が、全国各地で起こった。このポートルネッサンス 21 というのは、昭和 62 年代の段階で全国の 22 の港で計画が立ち始め、翌年の昭和 63 年にはさらに 22 の港や運河で計画が立てられていった。この潮流の背景としては、前述した運送業の転換により、船による運送が減っていったことと、港が使われなくなり廃れていったことがあげられる。富山県では、富山港から続いている富岩運河を中心に、岩瀬の方にある岩瀬運河、富岩運河とつながっている住友運河も対象にして、再整備を進めていった。また、整備の際は図 2-2 のように、大きく 6 つの区画に分けて整備を進めることになり、現在も大きな方向の転換はなく、最初に決めた方針によって整備が進められている。それぞれ 6 つの区画がその土地の特殊性を生かした独自のテーマを設定して、整備を進めていく中で、富岩運河環水公園は港へのエントランスゾーンという区画で整備がすすめられた。港のエントランスゾーンという区画のテーマとしては、「水と緑に包まれた新都心におけるシンボルオアシス」を掲げて整備が進められた。ちょうどこのポートルネッサンス 21 の潮流が起こった当時に建設省で「新都市拠点整備事業」を実施した。この制度は都市の再整備を行うときに利用できる制度であり、これに応じる形で、富山市も新たに「とやま都市 MIRAI 計画」

という駅南に比べて整備の遅れていた駅北地区を舟だまりなどの水面を利用して整備を進めようとする計画が立てられ、貴重な水辺の空間として生まれ変わる計画を推進する追い風となった。



図 2-2 「運河マップ(エントランスゾーンの詳細情報)」 富山県港湾課より提供

### 第3項 富岩運河の入り口である環水公園の景観の完成まで

富岩運河の入り口である環水公園の計画が立てられた当初は、運河の玄関としてのターミナル施設にすることが考えられており、水上レストランの建設等が考えられていた。しかし、今はターミナル施設というよりは、富岩運河の水上ラインの発着場のような形になっている。公園内には、水上レストランではないかもしれないが、スターバックスコーヒーやラ・シャンスというフレンチレストランを誘致している。水上レストランを設置しようと考えていたことからわかるように、計画の最初から、富岩運河を利用したクルーズの計画は存在していた。また、環水公園のデザインは一般公募によってデザインを募りその中から選出したデザインで、整備がすすめられたのだが、選ばれたのは東京工業大学の名誉教授である仙田満氏のデザインである。仙田氏は環境デザインを専門に研究している方で、有名な作品としては国際教養大学の図書館がある。参考にした運河公園などはなく、一般公募によりデザインを募ったことからわかる通り、オリジナリティを大切にしたい運河公園である。最近では他の県から視察が来ることもあるそうだ。建設自体は25年くらいのペースで行うことになっていて、完成した部分から公園として供用していくという形をとった。平成9年にフロントデッキという泉と滝の広場のところを一部供用したのを始まりに、順次供用範囲を広げていった。平成23年3月に全面供用になった。2017年度の8月26日に富山県美術館が新しく開館して、公園の整備自体は現時点で終了を迎え、今のところ、今後の整備予定はない。



図 2-3 「環水公園の施設案内図」環水公園ホームページより

### 第3章 富岩水上ラインについて

#### 第1節 富岩水上ラインの基本情報

この節は富岩水上ラインの概要をはじめ、歴史や運行に関する基本的な情報についてまとめる。

#### 第1項 富岩水上ラインの概要

富岩水上ラインは、富山駅北地域の地域活性化と観光振興を目的として運行されている。環水公園から中島閘門を通り、岩瀬を結ぶ運河のことを「水上ライン」と呼んでいて、県の旅客船「fugan」と「sora」（各定員 55 名）、市の電気ボート「もみじ」（定員 11 名）の3隻で、中島ルート（環水公園～中島閘門）と岩瀬ルート（環水公園～岩瀬）の定期運航を行うほか、貸し切り運航、環水公園のイベントの際に行われる特別運行を行っている。

このクルーズの運行自体は、富岩船舶株式会社が運行を行っており、その所管が学習支援船運営委員会にある。その委員会のメンバーが富山県の観光振興室と富山市の中心市街地活性化推進課という2つの行政機関が担っている。今後のクルーズの動きとしては、新しい船の購入も予定されており、地域住民を含め、観光客の利用増を目指しており、今後、県を代表する観光資源として発展していくことが期待されている。

#### 第2項 富岩運河水上ラインの歴史

運行開始から今年で10年目を迎える富岩運河水上ラインは、環水公園から中島閘門を通り、岩瀬を結ぶルートで運行されている。以前は休日のみの運行となっていたが、新幹線開通に合わせて平日の運行も開始した。

ルートの周辺は富山県の成長を支えてきた工業地帯が今もなお広がっている。昔は工業系の企業とともに建設業の会社が立ち並んでおり、富岩運河は貯木場として活用されていた。運送業が船の中心の状態からトラックなど陸の運送に変わったこともあり、富岩運河は使用されなくなった。その後しばらくの間は放置されていたが、運河が荒れ果てたことによって、町内会等から苦情が勃発し、昭和55年からは運河を埋め立て、道路にする方向性の話が出た。しかし、その後、当時の県知事の中沖さんが、「運河のおかげで工業県富山に成長ができたという面で、運河は富山県の成長の象徴。きれいに整備して残したい」という意向を出して、以後、30年以上かけて、今の形に整備された。この美しい水辺空間が水上ラインの大きな目玉となっている。

また、全国的にポートルネサンス21という、国主導の港や運河の整備事業が行われた際に、他の運河はほとんど埋められてしまったため、現在、運河が残っていて、観光として遊覧船を通わせているのは、富山、名古屋、小樽のみとなっている。

#### 第3項 富岩運河水上ラインのルート

富岩運河は貯木場など、船が運送業の中心となっていた時代に活躍していた運河の形が

そのままの状態が残っているという全国的に見てもとても珍しい運河となっている。運河の中心には中島閘門という国の重要文化財になっている閘門があり、閘門を観光船が通過するのは、日本では富岩運河のみだ。中島閘門の「水のエレベーター」は、パナマ運河のような珍しい仕組みになっているため、全国から富岩運河の水上ラインの遊覧船に乗るために観光客が訪れるスポットとなっている。

また、ルートとしては、中島ルート(環水公園～中島閘門)と岩瀬ルート(環水公園～岩瀬)の二種類のルートがある。前者は環水公園を出発し、中島閘門の操作室を見学、その後環水公園に戻ってくるルートである。後者は、環水公園を出発し、中島閘門を通り、岩瀬のカナル会館に到着する便とその逆で、岩瀬を出発し、中島閘門を通り、環水公園に到着する便がある。平日はそれぞれ中島ルートが4便、岩瀬ルート(環水公園発が2便、岩瀬発が2便)が4便ずつ定期運航している。休日は中島ルートの数が増え、6便に増便する。

料金は中島ルートが1,200円、岩瀬ルートが1,500円となっている。岩瀬ルートの方には、環水公園発の場合でも、岩瀬発の場合でもライトレールの片道乗車券がついている。

運行自体はここで記述した定期運航の他に貸し切り運行と特別運行というものもある。詳細は次の節以降に記述する。

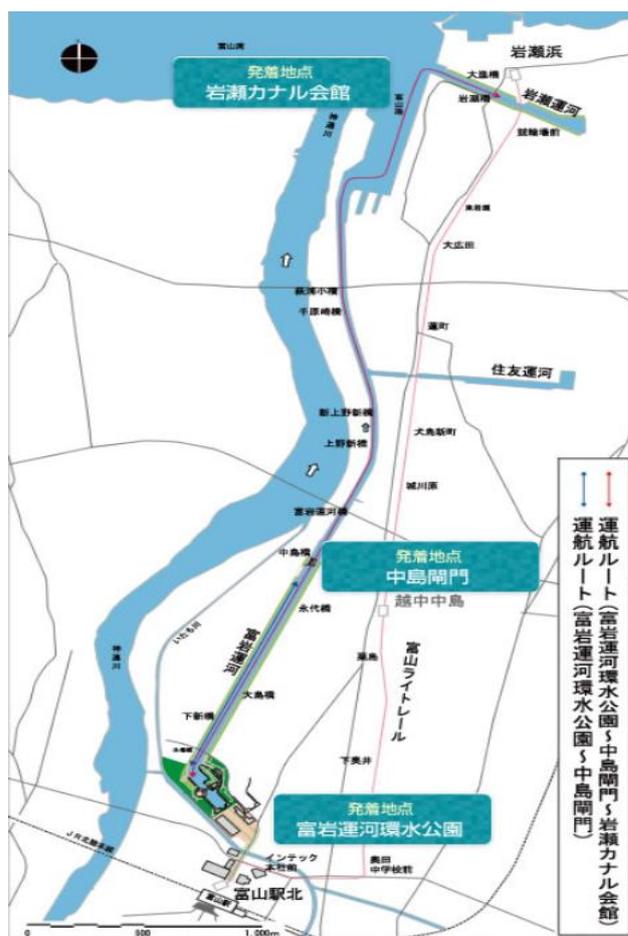


図 3-1 「水上ライン運行ルート」 富岩水上ラインホームページより

### 第3項 クルーズの紹介

水上ラインで活用されている船は現在三隻である。利用方法は通常運行や貸し切り運行、環水公園のイベントの時等の特別運行の際に使用されている。以下、詳細である。

#### ○「fugan (ふがん)」(乗客定員 55 名)



図 3-2 「fugan(ふがん)」 富岩水上ラインホームページより

平成 27 年 3 月の就航したソーラー船であり船体には、富山県の主要産業であるアルミを使用している。また、船体前方の曲げガラスには県内企業の技術が採用されている。全長は 17.8 メートル、全幅 3.3 メートル。主に貸し切り運行や特別運行の際に使用されている。

#### ○「sora (そら)」(乗客定員 55 名)



図 3-3 「sora(そら)」 富岩水上ラインホームページより

富岩水上ラインが就航した平成 21 年 7 月から運航しているソーラー船である。船体外装には、県産材のタテヤマスギを使用している。全長は 12.58 メートル、全幅 は 3.26 メートル。主に岩瀬ルートの際に使用されている。

○「もみじ」(乗客定員 11 名)



図 3-4 「もみじ」 富岩水上ラインホームページより

平成 21 年 7 月から運航しているアメリカの老舗メーカー「Duffy Electric Boat」社製の電気ボートである。全長は 6.6 メートル、全幅は 2.8 メートル。主に中島ルートの際に使用されている。

## 第2節 水上ラインの運行について

この節では、水上ラインの運行の面に焦点を当てて分析を行う。日常的な管理の面や水上ラインの運行期間、利用状況に目を向け、水上ラインの今後の可能性についても分析を行っていく。

### 第1項 富岩船舶株式会社

富岩水上ラインで使用されている三つのクルーズ船を日常的に管理・運行している会社である。クルーズの所有は、「fugan」と「sora」の大型旅客船は県の所在であり、「もみじ」という電気ボートは市の所有になっている。しかし、日常的な管理と運行に関しては、県と市で構成されている学習支援船運営委員会が富岩船舶株式会社に委託しており、富岩船舶株式会社が委託業務として、クルーズの管理運用を行っている。また、水上ラインで働いている乗組員やガイドの人たちも基本的には富岩船舶株式会社が雇用している形になっている。

富岩船舶株式会社は、運行準備期間中は富山湾改定の工事の手伝いを行ったり、船の管理を行ったりするなど何らかの業務は行っているようである。

### 第2項 水上ラインの運行期間と利用状況

水上ラインは3月から11月の約8か月間となっている。約8か月の運航となっている理由は次の項を参照してほしい。

詳しくは表3-5の利用状況の表を参考にしてほしいが、運行中は県内外から多くの観光客が訪れ、その数は年間5万4千人を超えている。これは環水公園水上ライン単独の数値である。水上ラインは新幹線が開通した年から平日の定期運航も始めたそうだが、その年から利用者数は年々増加傾向であるようだ。利用者の中心もその定期運航である。詳しくは表を見て欲しいが、平日と休日を合わせた定期運航の乗船人数は4万2千人を超える。表を見るとわかるが平日の利用者数が前年度比で約113%と大幅に増加している。これは運河環水公園を含む、水上ラインの広報によって、利用者が増え、利用者の中からリピーターが増えてきたことやインバウンドにより海外からの観光客が富山県としても増えてきており、水上ラインにもその影響があるからだと考えられる。

水上ラインは定期運行の他に団体向けの貸し切り運行とイベントの際に行う特別運行も行っている。貸し切り運行の金額は4万5千円で、今年、回数で数えると、年間220回で、昨年は約280回、一昨年は約220回の利用があった。人数にすると、今年の利用客数は10月末の時点で約6千3百人、昨年の同時期と比べ、人数も減っている。この要因としては、昨年は秋の県美術館の開館の際に多くの団体の利用者が県内外から訪れたためであると考えられる。一昨年と比較すると運行回数自体は変化していない。貸し切り運行に来る団体の利用者の方は一般の方に加え、企業の方も利用されるらしい。

また、特別運行に関しては、期間限定で季節に合った水上ラインのイベントを県や市が

主催で開催している。4月の上旬にはお花見クルーズということで、中島ルートを増便する形で特別運行を行っている。お花見クルーズは夜の会としてお花見ナイトクルーズというものも行っており、こちらは3,000円と値段は高くなるが、お弁当付きで、ライトアップされた桜をクルーズにのりながら鑑賞することができるコースとなっており、家族ずれやカップルに人気のコースとなっている。このお花見クルーズの好調が要因で特別運行の利用者数は前年度比130%となった。また、特別クルーズは水上ラインのイベントの際だけではなく、環水公園のイベントの際にも特別運行として運行することがある。環水公園で行われる花火の時の特別運行などは特徴的であるが、そのような形で環水公園のイベントを盛り上げるべく、運行することもある。加えて、特別運行には環境学習やPR運行という種類のものもある。環境学習はNPO法人カナル水辺倶楽部の環境教育事業の一環で行われていると考えられる。また、PR運行というものは、県が観光客誘致のために、東京のキー局に頼み、BSでのタレントの街歩き番組などで富山県を取り上げてもらうことがあるのだが、その時に運行することをPR運行と呼んでいる。このような取り組みが関東からの観光客の誘致につながっている。

このように県内外の観光客から人気がある水上ラインであるのが、その広報の仕方としては、都心の新聞や北陸の新聞に一面で広告を入れることが中心のようである。その時は水上ラインのみを扱うものもあるが、環水公園の宣伝の一部として組み込むことも多いそう。水上ライン単独ではなく、環水公園や近隣の施設とパッケージにして売り出しているようである。広報を担当する方からすると、なかなか水上ラインだけで広報しても船だけ乗りに訪れてくれる人は考えにくいとのことで、環水公園など、周辺の美しい自然環境や周辺の商業施設と連携しながら広報を行う必要性を感じているようだ。

運行種別		H29利用者数	H30利用者数	対前年度比	備考	
		(3/25～10/31)	(3/25～10/31)			
通常運行	平日	岩瀬便	8,328人	8,611人	103.4%	2往復/日
		中島便	6,819人	8,524人	125.0%	4往復/日
		小計	15,147人	17,135人	113.1%	
	土日祝	岩瀬便	10,963人	10,595人	96.6%	2往復/日
		中島便	15,277人	15,246人	99.8%	6往復/日
		小計	26,240人	25,841人	98.5%	
	全日	岩瀬便	19,291人	19,206人	99.6%	
		中島便	22,096人	23,770人	107.6%	
	計		41,387人	42,976人	103.8%	
貸し切り運行		7,703人	6,368人	82.7%		
特別運行		3,644人	4,763人	130.7%		
環境学習・PR運行		658人	707人	107.4%	無料で運行	
合計		53,392人	54,814人	102.7%		

表 3-5 「平成 30 年度 富岩水上ライン利用状況(3 月 24 日～10 月 31 日)」 富山県観光振興課より提供

### 第 3 項 水上ラインの運行準備期間

水上ラインは 11 月末から 3 月頭までの 4 か月間は運行準備期間で運行を行わない期間がある。理由としては、季節的な天候の面もちろんあるが、大きな要因としては、港の工事の関係があげられ、水上ラインの運行準備期間中に富山湾の地底にたまっているヘドロにシートをかぶせその上に砂をのせ、ヘドロから出る有害ガスのダイオキシンを防ぐ工事を行っているためである。ヘドロは富山化学が製造していた農薬用の枯葉剤の影響である。そのため、富山化学は、この工事費用の半額を負担しているそうだ。工事は当初、2018 年度に終了予定だったが、「覆砂工法」という特殊な工法で工事を進めているため、予定よりも終了期間がずれ込んでおり、今後 5 年間は続く予定である。この工事が終わると、冬も運行することを考えている。現段階の富岩運河の船舶は冷暖房がついているものはないが、来年の 3 月に新しい船舶が完成して運行予定で、その船舶は 55 名乗り、冷暖房完備、トイレ付というもので、この船が完成すれば冬の期間も運行は可能になる。

#### 第4項 まとめ

水上ラインで使用されているクルーズの所在は、県や市のものであるが、日常的な管理、運行は富岩船舶株式会社が委託事業として行っていることが分かった。水上ラインの利用者数は年々増加傾向であり、富岩船舶株式会社はそのような利用者の増加を下支えしている存在だといえるであろう。

また、水上ラインを維持していくためには、定期運航による利用者の確保は今後も重要である。現状、水上ラインの利用者数は5万4千人ほどであるが、環水公園の利用者は140万人を超える。環水公園に来て、水上ラインには乗らない観光客の人も多いことが考えられる。そもそも、水上ラインの強みは、周辺の整備が終了していて、景色がいい所だと県の担当者はおっしゃられていた。一度、水上ラインに乗船した人はその美しい景観によって、リピーターになってくれるような観光資源がそろっていると思うので、環水公園に来てくれた際に、一度でいいので乗船してもらえるような仕掛けづくりが必要になってくる。

その仕掛けづくりとして、イベント運行などが有効な手段であると考えられるが、来年には新しい船が完成予定で、その新しい船は冷暖房、トイレ付ということで、特別運行で新しいイベントで運行するなど、イベントの種類増加も見込めるだろう。

富岩船舶株式会社が日常的な管理、運行を担い、水上ラインのハード面を支え、ソフト面で県や市が様々なイベント等で仕掛けていく。整備が進んでいる今、重要になってくるのはソフト面での取り組みになるのは間違いない。

次の節からは、富岩船舶株式会社や、県や市のように、水上ラインを支えている人々の関係とその取り組みについてみていく。

### 第3節 水上ラインに関わる人々の取り組み

この節では、富岩水上ラインを日常から支えているクルーズの乗組員や水上ラインのガイドの方々など、水上ラインに関わる「人」に焦点を当てて分析を行う。

#### 第1項 水上ラインに関わる人たち

前述のとおり、富岩水上ラインは富岩船舶株式会社への県からの委託事業である。そこで働く乗組員の多くは富岩運河船舶株式会社が雇用している人たちである。ここでは富岩船舶の日常的な管理と運行に関わる船長や船長をサポートする乗組員たちを「一般乗組員」、クルーズ乗船中に富山県の歴史や水上ラインに関する解説するというガイド業務を行う人たちを「ガイド」という。

一般乗組員やガイドの人たちは、前職をリタイアされた65歳以上の方が中心である。アルバイトのような形で雇用されており、給料が最低賃金に近いお給料で、雇用期間もクルーズの運行期間のみと、限定されている。そのような不安定な雇用状況のため、若い人たちの雇用は極めて難しく、働いている人の多くは年金暮らしをしているの方々である。退職後の第二の人生としてガイドを始める方が多く、また、地元愛が強い人が多く、少しでも地元、富山県に貢献したいと思い働かれています、それぞれやりがいをもって、楽しく活動されている方が多いようだ。

また、働いている人たちの定年は特にはないが、大体の人が80歳過ぎるくらいまで働き、それを目途に辞めていくそうである。

#### 第2項 一般乗務員

主に船長と乗組員の二種類の仕事があり、富岩運河船舶株式会社が雇われている人たちのことである。

船長は船の操縦を行う人のことである。船の免許を取得している人をお願いしている。船の免許を持っている人は、富山県内に意外と多くいるらしく、趣味で釣り船やヨットを持っている人や、友達に船を借りて海に出ていく人もいるらしい。富山県で船乗りの人が多い理由としては、昔、富山商船学校(現、富山高専射水キャンパス)があった影響もあるという。

乗組員は船長の船の運行を補助する役割の人である。乗組員に関しては、必ずしも船の免許を持っている人というわけではないようだ。船が発着場に到着する際に、ロープで船を固定する仕事や運行中の船長の仕事のサポートを行っている。また、チケット売りやチケット売り場周辺の掃除等の仕事も乗組員の仕事になっている。

#### 第3項 水上ラインのガイド

水上ラインの特徴は、何といたっても乗船中のガイドだと思う。詳しくは次の項で扱うが、乗船中、富山の歴史や富岩運河の解説をずっと行ってくれる。ガイドを行うこと自体

には、静かに水上ラインを楽しみたい利用者の方も中に入るそうで、人によっては否定的なとらえ方をする利用者もいるそうだが、水上ラインに乗船したら必ずガイドがついてくれるのは大きい特徴だといえる。

ガイド業務を担っている団体は、主に環水公園のガイド全般を行っている「富岩運河かたりべの会」と中島閘門周辺に住んでいる人たちで構成されている「NPO 法人カナル水辺倶楽部」、環水公園のイベントの主催や広報活動も行っている「一般社団法人地域デザイン研究所」の3団体の人にガイドをお願いしている。

このガイド業務の件からの委託事業になっており、「富岩運河かたりべの会」と「NPO 法人カナル水辺倶楽部」は富岩船舶株式会社が雇用しているガイド業務にあたっていて、「一般社団法人地域デザイン研究所」の方は「一般社団法人地域デザイン研究所」が雇用している人たちがガイド業務を行っている。平日のガイド業務は「一般社団法人地域デザイン研究所」の方が担当し、休日や祝日のガイドは富岩船舶株式会社が雇用しているガイドの人たちが担当しているようだ。中には「富岩運河かたりべの会」と「一般社団法人地域デザイン研究所」の両団体に所属されているガイドの方もいるようだ。

なお、水上ラインができた2009年から4年前の2014年までは土日のみの運行で、「富岩運河かたりべの会」と「NPO 法人カナル水辺倶楽部」がガイドを担当していた。今のような平日運航が始まったのは2014年の新幹線が開通してからである。

#### 第4項 水上ラインのガイドを行っている団体

水上ラインのガイドは、前項でも述べた通り、3団体が関与している。これらの団体に所属しているガイドは日ごろから環水公園、あるいは富山県という地域に貢献したい気持ちを強く持っており、その思いをもとに活動している。

ガイドで話されている内容に関しては、各々の団体で勉強会を行っていたり、先輩ガイドとともに乗船して、先輩ガイドの人の話を聞いて勉強したり、して学習を積んでいるようである。水上ラインの運行当初の2、3年は県が作成したビデオを利用者に向けて流していたようで、ガイドはいなかったらしいが、ビデオが撤去されてからはガイドで解説をしながらクルーズ船を楽しむという今の形になったようである。そのガイドも、最初は富山市が資料を作成して、それを読み上げる形だったが、最近は各々の団体での勉強会やとやま観光未来創造塾のガイドコースを利用しながらガイド技術を磨き、ガイドの人が各々の得意な分野の話話すなど、個人個人がアレンジを加えたガイドを行っているようである。ただ、基本的なベースとして富岩運河の歴史を語ることは全員共通している。人によっては、富岩運河周辺に生えている木の話、野鳥の話など、各々の得意な分野の話をしてくれるようである。

以下、それぞれの団体について詳しく見ていくことにする。

#### ・富岩運河かたりべの会

主の業務内容は環水公園を案内するガイドで、もともと環水公園のガイドを行うために2008年に作られた団体である。主に土日のガイド業務を担当していて、所属している人数としては大体11名前後である。環水公園のガイドに関しては、ガイド料を払えば環水公園の中や周辺を散策するガイドを行ってくれる。なお、コースは、所要時間約1時間で「公園散策コース」「運河散策コース」「中島閘門見学コース」などがあり、2千5百円ほどでガイドを行ってくれる。水上ラインが平日運航になってからは、水上ラインのガイドも務めるようになったが、今の仕事の配分的には水上ラインのガイドの方が比率的には大きいようである。

また、これは他のガイドグループの人にも言えることかもしれないが、かなり勉強熱心な方が多い団体だそう。先輩のガイドしている姿から勉強し、一通りのガイド業務をこなせるようになった後も、普段からラジオや新聞などを活用し、情報を集め、水上ラインでのガイドの質をさらに上げようと努力して、生活している方々が多いようだ。水上ラインのガイド業務を担当するためには、とやま観光未来創造塾のガイドコースを受講することが必須だと団体内で決まっているようである。そのような取り組みを行うなど、水上ラインの利用者に楽しんでもらうことを第一に考え活動している組織である。

かたりべの会を構成しているのは11名で、60歳以上のメンバーが多く、若くても50歳後半の方だそう。メンバーの方々はリタイア後の第二の人生として活動している。かたりべの会の創設時は30名以上のメンバーが在籍していたが、とやま観光未来創造塾のガイドコースの認定試験に合格が必須にしてからはメンバーが一気に減り、今の11名に落ち着いた。創設時は、ガイドの解説だけでなく、楽器で音楽を奏でるなど、ガイドの好きなことをやっていた人たちが多かったようだが、ガイドの質を上げるために認定試験制度を設けたようである。ガイド業務にやりがいを感じているメンバーが多く、お客さんが自分のガイドによって感動している姿を見て、やりがいを感じ、モチベーションを保っているメンバーが多い。

名称	富岩運河かたりべの会（ふがんうんがかたりべのかい）
案内対象	個人・団体
案内時間	9:00～17:00
案内地域	富岩運河環水公園、中島閘門、富山駅北地域、他に水上ライン貸切便コース見どころ場所など（PDF）は <a href="#">こちらをクリック</a> してご覧ください
ガイド料金	ガイド1名につき2,500円（所要時間約1時間） ※10名ごとにガイドが1名ご一緒します。
外国人受け入れ	不可
申込時期	ご案内の2日前まで
お問い合わせ	富山市観光協会 Tel 076-439-0800 Fax 076-439-0810 ※富岩運河かたりべの会の窓口をご案内します。
関連ホームページ	<a href="#">富岩運河環水公園</a> <a href="#">富岩運河水上ライン</a> <a href="#">とやま観光ナビ</a>

表 3-6「富岩運河かたりべの会のガイド料の表」富山県の観光公式サイト「TOYAMA NET」より

・NPO 法人カナル水辺倶楽部

NPO 法人カナル水辺倶楽部は、富岩運河の周辺住民をはじめ、広く関心を持つ人に対して、水辺を活用した親水事業や環境整備事業を行い、地域一帯の環境保全、まちづくりの推進等に寄与することを目的とする法人である。水上ラインでのガイドは環境保全実践活動事業として行っており、ガイドのほかにも、中島閘門周辺の清掃、プランターへの花の植え込み等を行っている。また、自然環境教育事業というものも行っており、地元の奥田北小学校の児童の総合的な学習の一環として、富岩運河水上ラインや中島閘門の歴史に関する授業に協力をしている。カナル水辺倶楽部のメインの活動は水上ラインではなく、教育事業や中島閘門周辺の清掃、プランターの埋め込みだと考えられる。

もともと、富岩運河の歴史でも述べたように、昔の富岩運河は荒れ果てており、近づきたくない場所であったが、そのような場所を再生し、美しい水辺空間をよみがえらせた。そのような経緯から、この水辺の空間を今後も守っていくべく、富岩運河を愛する住民たちから構成されているのが、このカナル水辺倶楽部である。今後も、この環境を守るためには、子供たちも巻き込んで活動していくことが必要であるため、小学生を対象とした自然環境教育事業も行っているようである。その教育事業の詳細に関しては以下の図 3-7 をご覧いただきたい。教育といっても座学ではなく、フィールドワークがメインの作りとなっており、子供たちが親や祖父母を含む地域住民とのふれあいや実際の水質の実施調査を

通して、富岩運河に愛着を持つのはもちろんのこと、環境に対しての意識を高めることができる持続可能な開発のための教育、ESDの側面を兼ね揃えた事業である。

そのような事業を行っている団体のため、ガイドの際の話の内容としては、富岩運河についての話や野鳥など、周辺の自然環境に関する話題が多い。

月	主な学習活動
4	○奥田北校区の環境について話し合う。(2時間)
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公園がたくさんあるし、木も多いからよいと思う。</li> <li>・富岩運河によく散歩に行くので気持ちがよいよ。でも、ごみがあるんだよ。</li> </ul> ○運河は気持ちのよい場所か確認に行き、どう思ったか話し合う。(4時間) <b>実践(1)①</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみが落ちていたから、汚いと思う。</li> <li>・去年の町探検のとき、船にたくさん観光客が乗っていたよ。きれいだからたくさん人が来るんだと思うよ。</li> <li>・本当に泳ぐことができたのかな。</li> </ul>
6	○運河の環境について大人はどう思うかアンケートをとる。(4時間) <b>実践(1)②</b>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものアンケート結果と違って大人は、運河をきれいだと思っている人が多いよ。</li> <li>・大人は、たくさん生き物や植物を見たことがある人が多いよ。</li> <li>・運河を守るためにボランティアをしている人がいるらしいよ。</li> </ul> ○環境サミット(富岩環境会議)、水のエレベーター体験や遊歩道調査を行い、地域の方に詳しく教えてもらう。(4時間) <b>実践(2)①②</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運河には船が二艘あるらしいよ。乗ってみたいな。</li> <li>・中島閘門が海と川の間だから、魚の種類が違うらしいよ。</li> <li>・カメ、カワセミ、コイなどいろんな生き物がいるらしい。見てみたいな。</li> <li>・一度は埋め立てられてしまいそうな運河だったんだね。</li> </ul>
9	○運河のよさや守られてきたことを発表する。(宿泊学習、学習発表会)(12時間)
10	<b>実践(3)①②③</b>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人にとって悪臭がした運河が、愛される運河に変わった理由を伝えよう。</li> <li>・運河の歴史を伝えて、地域の人にもっと運河を知ってもらおう。</li> </ul>
12	
1	○運河の魅力をパンフレットにまとめる。(34時間) <b>実践(3)③④⑤</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他の地域の多くの人にも運河の魅力を知ってもらおう。</li> <li>・実や花をつける植物がたくさんあることが分かったよ。</li> <li>・冬になったら新しいカモがいっぱい来ておもしろいな。</li> <li>・レイアウトや文章、見出しについて考えよう。</li> </ul>
2	○パンフレットで運河の魅力を発信する。(富山駅)(10時間) <b>実践(3)⑥⑦</b>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富山駅にパンフレットを置かせてもらうお願いに行こう。</li> <li>・富山駅周辺のホテルにも置こうよ。観光客に来てもらえるよ。</li> <li>・富山県以外の人にも伝えたいな。</li> </ul>

図3-7「地域に心を寄せる子どもを目指して」富山県総合教育センター報告書より

・一般社団法人地域デザイン研究所

地域デザイン研究所は環水公園のイベントの企画運営のほかに婚活に関する事業も行っている団体である。そもそもは地域の人々と関わり合いながら、新しい人・新しい経験・新しい発見に出会う瞬間を地域住民とともに作り、小さな会社から大きなわくわくを発信することを理念に活動していて、水上ラインのガイド業務を行っているメンバーは、正社員として雇用しているのではなく、アルバイトのような形で雇用している。ガイドの人の

シフトづくり等はスタッフといういわゆる正社員の立場の方が行い、そのシフトの時間にガイドがガイド業務に入るといった形である。

地域デザイン研究所がガイド業務を請け負い始めたのは3年目である。水上ラインの平日運航が始まったあと、平日のガイド業務は「NPO 法人富山観光創造会議」が行っていた。しかし、水上ラインが営利的な側面があり、本来の業務と逸脱した業務内容だったため、2015年から地域デザイン研究所がガイド業務を請け負う形になったようである。

ガイドの人数は15名程度で、中にはかたりべの会を兼任しているガイドが4名程度いるらしい。こちらの団体も楽しくガイドを行っているようで、運行休業期間はガイドの業務がなくなるのだが、その間に次の年に向けてのガイドの資料作りに励む人もいるようである。

こちらの団体ではとやま観光未来創造塾のガイドコースの受講は必須ではないものの、地域デザイン研究所独自で採用面接や試験を行っており、それをクリアできないと水上ラインのガイド業務に付けないことになっている。とやま観光未来創造塾のガイドコースは勉強のために受けているガイドの方も中にはいらっしゃるようである。

#### 第5項 水上ラインのガイドの勉強手段としての「とやま観光未来創造塾」

「とやま観光未来創造塾」とは平成23年の6月に開校された、富山県の観光業を魅力あるものにするため、そこで働く人たちの「おもてなし力の向上」のために開校されている塾である。北陸新幹線の開業に向け、開校された様だ。

塾の内容としては、塾のカリキュラムの中では、卒業生と現役受講生が交流できる機会なども設置しており、そのような交流の中で、新しい観光業としての事業が立ち上がるなど、盛り上がりを見せている。中には石井富山県知事が自ら登壇される機会もあるが、基本的には大学の教授や観光業で成功された講師陣が塾の授業を行う。主に観光業に関わる人たちが、基本的に自主的に、自信の勉強のために、自分に合ったコースを受講する方が多い。

「とやま観光未来創造塾」で設置されているコースは大きく5種類のコースがあるが、水上ラインのガイドの人はその中でも「観光地域づくり入門コース」と「観光ガイドコース」の中級編を受ける人が多いようだ。入門コースで基礎的な富山県の観光に関する情報を学び、中級コースでガイド技術の習得を行う。中級編のコースでは、座学に加え、実際に観光地として栄えている飛騨などの地を訪れ、実践学習を行ったり、鳥羽で泊まり込みのガイド講習を受けられるコースである。最終の合格試験も実際に富山城周辺の景観をガイドするという実践的なものになっており、受講すると実践的な力つくようになっていく。

受講が終了する富山県から認定ガイドの資格がもらえる。この資格がないと水上ラインのガイドとして活動できないなどの拘束力はなく、あくまで一定のガイドの力を保証するものになっている。ただ、ガイドの団体によっては、「観光ガイドコース」の中級編の受

講を行わないと、ガイドとして活動できないように位置付けて受講を促しているガイドの団体もある。

#### 第6項 まとめ

この節では、富岩水上ラインにかかわる様々な人々とその取り組みについてみてきた。とりわけ、水上ラインでガイド業務を行っている人々の取り組みについてみてみたが、水上ラインの利用者をもてなそうと、ガイドの質を向上させようと努力している人達が多い印象を受けた。このようなことから、このガイド業務は、水上ラインを支えている大きな力になっていることが間違いない。

また、現状として、このガイド団体はお互いに関わりがほとんどないらしいが、将来的に3団体が合併するという話もあるようである。ガイド団体が合併することによって、お互いの団体が「水上ラインの利用者のおもてなしのために」という共通の目的に向かって学び合い、励ましあいが進むと思うので、さらにガイドの質が向上することが期待できる。

次の節からは、これらの人々がかかわりあって作っている水上ラインの観光資源としての側面について分析する。

#### 第4節 観光資源としての水上ライン

この節は、水上ラインの観光資源としての側面に注目して分析を進める。国内でも有数の運河を利用した富岩水上ラインがなぜ観光資源として輝きを放ち、高い評価を受けているのかについて分析していきたい。

##### 第1項 水上ラインの見どころである中島閘門

水上ラインの高い評価の理由として、環水公園と富岩運河の整備がすすめられた美しい水辺空間を利用していることがあげられる。その美しい景観の中でも特に注目されているのが中島閘門である。

中島閘門は、富岩運河の建設にあわせて、昭和9年(1934年)に造られた。運河のおおよそ中央となる地点に設置され、水位差を二対の扉で調節するパナマ運河方式(前後のゲートを交互に開閉することで水位の異なる水面を調整)の閘門で、中世から近代のヨーロッパで発達した水運技術を取り入れている。

この「パナマ方式」という点が、利用者の人たちから評判が良く、全国的にも貴重で、水上ラインの立派な見どころになっている。この閘門を見に水上ラインを訪れる観光客の方も少なくないようだ。

この閘門を含め、昔ながらの運河の様子が残っていて、特に船舶関係者が昔ながらの国際港から市内に物を運ぶ時の船舶の運航ルートを再現するという運河の使い方を体験出来るのは貴重で、素晴らしいと首都圏からの観光客に人気のようだ。



図 3-8 「中島閘門」 富岩水上ラインホームページより

## 第2項 水上ラインのガイド業務の内容

水上ラインの最大の特徴の一つに挙げられるのが、「乗船時のガイド」である。どの便に乗ってもガイドがついてくれて、いろいろな解説を交えながら水上ラインを楽しませてくれる。この項では、そのガイドが、水上ラインに乗船した際に、前節で紹介したガイドの人が実際にどんなことを話しているのかを記載し、分析を行う。

フィールドワークに訪れたのは、2018年7月20日(金)10時10分発のもので、岩瀬ルート(環水公園発、岩瀬カナル会館着)である。クルーズ船は「sora」であった。乗船時は、ガイドは塚本さんという方がガイドを行ってくれた。平日のガイド業務にあたっていたため、一般社団法人地域デザイン研究所のガイドであると考えられる。ガイド歴は4年目。

実際に塚本さんが話していた内容から、どのような内容でガイドがなされているのかを見ていく。

### 《ガイドの内容》

#### ○富山県の紹介

ガイドの内容として、まずは富山県や富山市に関する話があげられる。富山県に観光に来た人に向けたガイドである。

塚本：皆さんご存知のブラックラーメンがありますが、ブラックというのはこの界隈で働く労働者のために作られたといわれております。

ブラックラーメンは富山県のご当地ラーメンのことであるが、このように富山県や市の名産品などの話も聞いて取れた。

塚本：富山平野の平野はね、富山県内の67%の残り、わずか33%がね、富山平野が展開されています。67%は森と山になっておりまして、このように富山は多くの森と山に育まれているのが、富山の土地でありまして、この33%平野はね、豊かな水に育まれていてね、昔から水田がね、お米が耕されておりました。お米が1キロ育てるには4000リットル必要といわれていてね、本当に多くの水が必要なんです。この豊富な水が富山県を支えているんですね。

このように、富山県の地形の話も随所に見て取れた。名産品の話もそうだが、富山県外から来た観光客に向けて、富山県や富山市の情報を発信して、歓迎しようという気持ちが見て取れる。また、このような話をきっかけに、富山県や市への興味、関心が高まり、水上ライン以外の観光名所を訪れるきっかけや、再度、富山県に観光で来るきっかけにもつながるよう感じた。

## ○景観の話

水上ラインは、乗船中にめまぐるしく景色が変わっていくのだが、その景色、景観についてのガイドも行っている。

塚本：右手の方はウラミノ滝といまして、三台のベンチが取り付けられていまして、遊歩道を歩く人たちの休憩スポットとなって落ちます。ここで一休みする人が多いです。まだ朝が早いので人はいませんが。

裏見の滝とは、公園のような場所に流れる、小さな滝のことである。そのような地域住民の生活の情報もガイドしてくれる。

塚本：この赤い大きな橋が国道8号線になります。左側に行くと石川と福井、右側に行くと新潟につながるという、北陸を横断する大きな道路となっております。

このように一見するとわからない大きな橋の情報のガイドもしてくれる。水上ラインは整備の終わった環水公園や富岩運河の美しい水辺空間を利用したものになっているが、その強みである景観を一つひとつ丁寧に解説してくれるのもガイドのいい所のように感じた。

## ○水上ラインの見所である中島閘門

水上ラインの見どころである、中島閘門の水のエレベーターの解説も丁寧にしてくれ、観光客にも楽しめるようになっている。

塚本：今から体験する閘門はね、何と83年前にできた施設。現在も当時のままのスタイルでね、船が通過します。唯一、違うのはね。貨物を載せた船がね、材木がこの運河を流通していたのですが、今は三隻の観光船が通るだけとなっております。

塚本：昭和初期の土木技術が評価されましてですね、近代化資産第一号として、国の重要文化財になった施設になった、しかも閘門で国の重要文化財、しかも現役で活躍しているというのはね、全国広しと言えどもここだけではないかと思えます。

このように中島閘門の歴史についてもガイドを行い、中島閘門のすごさを改めて感じさせてくれる。事前に知識がない人にとっては、ここで中島閘門のすごさを実感する人が多いと思う。

塚本：前方の扉が開きました、5分足らずで、下流で船が出ていくことができます。登りも下りも、5分以内にね、船が通れるという、83年前に作られたとは思えないほどの、船

の機能をいまだに保持しております。

中島閘門の水のエレベーターの体験に入ると、見る見るうちに水位が下がっていくのが体験できるのだが、その体験中も観光客を飽きさせないために、中島閘門に関するガイドを続けてくれる。

このように水上ラインのガイドは様々な内容のガイドを行い、観光客を魅了させてくれる。ここで紹介したガイド内容以外にも、水上ラインのクルーズ船の紹介の話をはじめ、天気の話など、ある種、雑談のような内容のガイドもあった。その場の雰囲気に合わせて話をしているようだった。

### 第3項 水上ラインを訪れる観光客

水上ラインを利用している観光客数は年間5万4千人に上る。詳しくは表3-9の地域別の利用状況の表を見て欲しいが、県内からの観光客の割合が約3割、県外からの観光客の割合の約7割のうち、1.5割を石川県からの観光客が占めている。同じくらいの割合で東京からも観光客が訪れている。この両都県に次いで多いのが神奈川からの観光客で、北陸新幹線開通の影響が大きいようだ。

岩脇さんによると、石川からの観光客が多い理由としては、目新しさが要因だという。石川県の県民は、兼六園などの県内の観光名所に行き飽きているため、富山の新しくできて綺麗な観光名所を訪れるために観光バスに乗り、団体で訪れるようだ。

関東からの観光客が多い理由としては、やはり北陸新幹線開通の影響が大きく、北陸新幹線開通によって富山県のPRを東京で行う際に、環水公園や水上ラインもおすすめしていることも水上ラインへの観光客数の増につながっている。東京からの観光客の声を聞いていると、昔ながらの運河の状態がそのまま残っているところが魅力らしく、特に船舶関係者が、昔ながらの運河の使い方、国際港から中島閘門を通り、市内に物を運ぶ、という船舶の運航ルートを再現していて、水上ラインの遊覧船に乗ることによって、それを体験出来て素晴らしいという声が多い。実際、東京の日本橋の船に乗ると、周りはコンクリートの壁、上を見れば高速道路が通っていて、昔の面影を全く感じない。もちろん閘門に観光船が入っていき、パナマ運河のような「水のエレベーター」を体験できるという珍しさも観光客誘致の大きな要因になっているが、東京からの観光客の声からはこのような声も聞こえてきているようである。

県内外比率(サンプル数1,906件)		地域別 利用者数
県内	27.0%	12,684人
県外	73.0%	34,294人
計	100.0%	46,978人

県外利用者上位の都道府県		地域別 利用者数	県外利用者 構成比
1 石 川(1)	14.8%	6,859人	20.0%
2 東 京(2)	10.3%	4,835人	14.1%
3 神奈川(4)	5.5%	2,572人	7.5%
4 福 井(3)	5.4%	2,538人	7.4%
5 愛 知(5)	4.4%	2,058人	6.0%
6 埼 玉(6)	4.2%	1,955人	5.7%
7 長 野(6)	3.7%	1,715人	5.0%
8 大 阪(8)	2.9%	1,372人	4.0%
その他	21.8%	10390人	30.3%
計	73.0%	34,294人	100.0%

※地域別利用者は推計値

※( )書きは前年度の順位

※9月末までの利用者総数は46,978人

表 3-9 「富岩水上ラインの地域別利用状況(H30 年度 9 月末まで)」 富山県観光振興室より

#### 第4項 水上ライン後の観光客の動き

水上ラインに乗船すると「岩瀬まち歩きまっぷ」という岩瀬の町並みを散策する際に役立つマップを無料でもらえる。富山市の岩瀬地区は江戸時代から日本海を行き来する港町として栄えていた町で、建造物などからは当時の様子が見て取れる観光スポットとなっている。まち歩きまっぷは、岩瀬の町並みが手書きで書かれていて親しみの持てるものになっている。また、観光名所やご飯どころの情報も詳しく載っている。例えば、国指定重要文化財に指定されている「北前船回船問屋の森家」の情報では、説明に加え、入場料、営業時間、休館日の情報が載っており、観光客にとってはありがたいものになっている。岩瀬ルートに乗船後、このマップを利用して、岩瀬の町を観光して帰る人は多いことが考えられる。

また、岩瀬ルートに乗船すると富山ライトレール富山港線(以下、ライトレール)の無料券をもらえる。そのため、帰りの道も確保できているので、安心して岩瀬ルートに乗船で

き、岩瀬の街並みを観光できる。

#### 第5項 まとめ

この節では、観光資源としての側面から水上ラインを見てきた。国の重要文化財である中島閘門を筆頭に、昔ながらの運用方法を残しつつ、富岩運河の整備も進んでいて美しい景観が保たれており、観光客からは高い評価を受けていることが見て取れる。

また、水上ラインのガイドによる解説も観光客誘致に大きな効果をもたらしているように感じた。ガイドから得られる情報はとても多岐にわたり、富山県を包括する内容から富岩水上ラインに特化した情報までさまざま聞き手を飽きさせない情報がそろっていた。このような「おもてなし」が現状、水上ラインの利用客数の増加につながり、富山の新名所としての存在感を日に日に増している要因であると考えられる。

## 第4章 考察と今後の展望

### 第1節 考察

本研究では富岩水上ラインに焦点を当てて分析を進めてきたが、その理由としては、富岩運河や環水公園の改築当初からの歴史を見てみても、これらの整備は「美しいふるさとづくり」をテーマに進められた。整備の後の最も注目すべき特徴として挙げられるのが、旧舟だまりを活用して作られた水面部分だと考えられる。その活用法によっては、無限大の可能性を水上ラインが秘めていると考え、水上ラインが観光資源として、どれくらいの価値があるものなのかを明らかにするため、様々なインタビューやフィールドワークを行ってきた。

その結果、水上ラインは年間5万人を超える利用者を誇っており、富山の立派な名所の一つになっていることが分かった。この観光客数を見ても、環水公園やその目玉である水上ラインは立派な富山県を代表する観光資源であるといえるのではないかと。また、その利用者の15%が東京からの観光客ということで、北陸新幹線開通の効果がここで出ているということがわかる。立地に関しても富山駅の北口から徒歩15分ぐらいという好立地であることが利用者増につながっていると考えられる。また、今回の研究を通して、中島閘門の「水上のエレベーター」など、富岩運河水上ライン独自の良さにも気づくことができた。この閘門を生かしたクルーズの運行は全国を見てもまれで、そういう現状を踏まえてもこの水上ラインは、観光資源として成功した事例としてみてよいだろう。そのような環水公園を含む、水上ラインの影響を受けてか、富山駅北地区の地価が上昇傾向になるなど、富山県にも大きな良い影響を与えている要因の一つといえるのではないかと。

また、本研究では、そのような水上ラインを支えている人たちにも焦点を当てて分析を行った。中でもクルーズ中に富山県や富岩運河に関する解説を行ってくれるガイドの団体の存在が明らかになったが、このガイドのように富山県を愛し、富山県の発展のために日々努力を重ね、主体的に活動している市民がこの水上ラインを支えていることを明らかにすることができた。

さらに、このように市民が輝けているのは、そのハード面をしっかりと整えた県や市の職員やクルーズの管理、運行を担当している富岩船舶株式会社のような民間企業の働きがあることを忘れてはならない。来年には、新しいクルーズ船が完成予定で、新しいクルーズ船の完成によって、水上ラインの活用方法が多様になり、さらに市民の活躍の場が増えていくことが考えられ、利用者の増加にもつながり、富山県に良い影響を与えるだろう。また、その新しいクルーズ船は、冷暖房設備やトイレも設置予定で、冬季運行を見据えた作りになっている。今はまだ富岩運河の地底の工事が終わっていないため、すぐに冬季運行はできないが、5年先には冬季運行の開始も考えられ、さらなる発展の可能性を秘めている。

加えて、ハード面においても来年の春には、富山駅南側を通っている富山地方鉄道富山気動線(以下、市内電車)と富山駅北側を通るライトレールが結合することが決定している。その結合によって、富山駅南側に住んでおり、今までは環水公園に足を運べなかった層が訪れるようになることが考えられ、さらに水上ラインも活性化することが考えられる。

## 第2節 今後の展望

以上のことを踏まえて来年度以降の展望について、個人的な見解が中心にはなるが述べていきたい。まず、今後の可能性について言及すると、考察でも触れたが、大きな可能性を持っているのは、ライトレールと市内電車の結合と新しいクルーズ船の購入の二点があげられるだろう。

一点目のライトレールと市内電車が結合することによって、駅の南側の地域に住んでいる住民が、駅北地区に足を運びやすくなる。そのことによって、利用者の増加は見込めるのではないかと。また、富山駅の北側と南側の行き来がしやすくなるという点では、観光客の誘致の面でも大きなアピールポイントになり、富山市内の観光客の動きが活発になり、水上ラインのみならず、富山市全体にいい影響が与えられることが予想される。それにより水上ラインの利用者の増加にもつながるのではないかと。

二点目の新しいクルーズ船の購入に関しては、将来的には冬の運行もでき、通年運航になることになるのが大きい。富山の冬は黒部アルペンルートに行けないなど、観光資源が乏しい中で、大きな役割発揮をできるのではないかと。雪化粧をした立山や海の風景は圧巻で、それをクルーズ船に乗りながら見物できるツアーを組むなど、観光客の誘致に向けて大きな期待ができる。通年運航ができるまでも、一隻船が増えることで、単純に貸し切り運行や特別運行の数が増えるなど、いい影響は期待できる。特に特別運行の面では、クルーズ船に乗って宴会をするなど新しいイベントもでき、多様なクルーズの使い方が考えられ、そのような意味でも観光資源としてさらに発展できるのではないかと。

そのような明るい面がある一方、今後の課題も見えている。インバウンド観光客への対応とガイドの高齢化の問題だ。インバウンドへの対応に関しては、外国人の観光客が増えてきている中で、ガイドが英語を話せない現状がある。国の政策等で今後、さらに外国人の観光客が増えることが予想される中で、ガイドもこのような現状に対応する必要があるのではないかと。「とやま観光未来創造塾」では、インバウンドの観光客向けの対応を学べるように観光ガイドコースに「新インバウンド専攻」を設置するなど、そのような現状に対応するためのコースを設置しているので、そこに水上ラインのガイドも参加し、英語のコミュニケーションを習得するのもありなのではないかと。英語コミュニケーションの習得が難しいのであれば、英語でのガイドが流れるワイヤレスイヤホンを使用したり、多言語のパンフレットを作成したりの対応策も考えられる。いずれにせよ、対応は必要であるだろう。

ガイドの高齢化に関しては、さらに深刻かもしれない。現状、65歳以上の高齢者の方に頼っている形で、メンバーの入れ替わりもほとんどない現状がある。そのような体力のない高齢者にずっと頼っていいのかは疑問だ。ここ数年の夏は猛暑日が続くこともあり、クルーズの上は過酷な状態になることもある。また、後継者という意味でも、メンバーの入れ替わりがない中で、どのようにガイドを継続していくのかも課題である。直近の問題ではないかもしれないが、このような課題に向き合っていく必要はあるだろう。

様々な可能性や課題がある富岩水上ラインであるが、富山県の発展のためにも今後重要な観光資源になっていくことは間違いないだろう。

《参考文献・URL》

・田所稔 1988 「いきいきカナル富山」『港湾』,64-67

・一般社団法人地域デザイン研究所ホームページ(<http://cdlabo.jp/>)

・富山県総合教育センター報告書「地域に心を寄せる子どもを目指して」

([http://www.tym.ed.jp/c10/kenkyuu/kyouikukennkyuronbun/h27/kekka/01\\_oshida.pdf#search='%E6%B0%B4%E8%BE%BA%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%83%96+%E5%AF%8C%E5%B1%B1%E7%9C%8C'](http://www.tym.ed.jp/c10/kenkyuu/kyouikukennkyuronbun/h27/kekka/01_oshida.pdf#search='%E6%B0%B4%E8%BE%BA%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%83%96+%E5%AF%8C%E5%B1%B1%E7%9C%8C'))

・富山県都市計画課 2001「富岩運河環水公園と富山の文化発展について」『公園緑地』Vol.62 No.4,68-70

・富山県の観光公式サイト「TOYAMA NET」(<http://www.toyamashi-kankoukyoukai.jp/>)

・富岩運河環水公園ガイド(一般の来場者へ配布されているパンフレット)

・富岩水上ラインホームページ「魅力運河クルーズ 富岩水上ライン」(<https://fugan-suijoline.jp/>)

・NPO 法人カナル水辺倶楽部平成 29 年度事業報告書(<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/document/016000229/hokoku/201770/2017%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E7%AD%89.pdf>)